小児の口蓋にみられた多形性腺腫の1例

水谷俊宏・水野有功*・並川有隣*
藤内 祝**・上田 実**・金田敏郎**

A case of pleomorphic adenoma of the palate in a child

Toshihiro MIZUTANI・Isao MIZUNO*・Arichika NAMIKAWA*
Iwai TOUNAI**・Minoru UEDA**・Toshio KANEDA**

Abstract: Pleomorphic adenoma is the most common salivary gland tumor and it usually appears between the ages of 20 and 50 years. Few cases occur in childhood and pleomorphic adenoma rarely develops on the palate.

We encountered a pleomorphic adenoma which had developed on the hard palate of a 10-year-old boy. The tumor was a semispherical mass measuring 20×20 mm and situated in the posterior part of the right hard palate. Its surface was covered with smooth and normal mucosa. The tumor had an elastic hardness and was not mobile. There was no spontaneous pain or tenderness. Under a diagnosis of pleomorphic adenoma based on biopsy findings, the tumor was excised together with a surrounding safety margin of tissue (5 mm) under general anesthesia. The removed tumor was oval and well encapsulated, and the cut surface was whitish grey and solid. The palatal bone was resorbed due to compression by the tumor. A layer of the bone in the resorbed area was scraped out and the wound was dressed with a stent. The tumor has not recurred since the operation.

Key words: pleomorphic adenoma (多形性腺腫), palate (口蓋), child (小児)

緒 言

多形性腺腫は、20～50歳代に好発し、小児での発生はまれで¹⁾、特に口蓋部に生じたとする報告はきわめて少ない²⁾。今回著者らは10歳、男児の硬口蓋部に生じた本腫瘍の1例を経験したので報告する。

刈谷総合病院歯科口腔外科
(主任：西原幸治部長)

* 社会保険中京病院歯科
(主任：並川有隣部長)

** 名古屋大学医学部口腔外科学教室
(主任：金田敏郎教授)

Department of Dentistry and Oral Surgery,
Kariya General Hospital (Chief: Kouji Nishihara)

* Department of Dentistry, Social Insurance
Chukyo Hospital (Chief: Arichika Namikawa)

** Department of Oral Surgery, Nagoya University,
School of Medicine (Chief: Prof. Toshio Kaneda)

受付日：平成4年9月20日

症 例

患 者：10歳 男児。

初 診：平成2年4月■日。

既往歴および家族歴：特記すべきことはない。

現病歴：平成元年3月、近歯科医院にて治療の際、右側硬口蓋部の腫瘍を指摘され、摘出術を受けるも再発し、当科を紹介され来院した。

現 症：右側硬口蓋に直径 20 mm の周囲との境界明瞭な半球形状の非可動性の腫瘍を認めた。腫瘍表面は健康粘膜色を呈し平滑、弾性硬で圧痛および自発痛は認められなかった(写真1)。なおX線、臨床検査では特別な異常所見は認められなかった。

処置および経過：平成2年4月■日、局所麻酔下に腫瘍前方部より生検を施行し、多形性腺腫との病理組織診断を得た。平成2年4月■日、GOE全身麻酔下に腫瘍の境界より5 mmの安全域を設定し、骨膜に達する切開を加え、腫瘍を骨膜と周囲軟組織とともに一塊として摘出した。腫瘍は薄い線維性の被膜で被われており、前方部被膜には軽度癒着がみられた。腫瘍摘出後の口蓋骨に

写真1 初診時口腔内写真

写真2 摘出物剖面写真

写真3 病理組織像 (H-E 染色, ×200)

は腫瘍により圧迫吸収された軽度の陥凹を認め、一部に粗造な面も認められたため、摘出後、口蓋骨表層骨を一部削除し、床副子にて創面を被覆し手術を終了した。術後1年9か月を経過するが再発の徴候もなく経過良好である。

摘出物所見：摘出物は30×20×15 mm大で、卵円形、表面は平滑、一部に凹凸を呈し、剖面は灰白色充実性であった(写真2)。

病理組織学的所見：摘出物の全剖面による検査では、腫瘍は薄い線維性の被膜で被われており、実質部では多形性細胞の小充実状ないし索状構造が線維性結合織帯によって分けられており、いずれの部分においても細胞の異型性等は認められなかった。間質部では粘液腫様を示す部分(写真3)、硝子様変性を示す部分が認められた(写真4)。また、被膜には被膜外への腫瘍細胞の浸潤がみられた(写真5)。

写真4 病理組織像 (H-E 染色, ×100)

写真5 病理組織像 (H-E 染色, ×100)

↘は被膜外への腫瘍細胞の浸潤を示す。

表1 本邦における小児口蓋部多形性腺腫報告例

症例	報告者	年齢(歳)	性別	大きさ(mm)
1	小 守(1977)	15	女	20×20
2	小 守(1977)	15	男	30×25
3	小 守(1977)	14	女	8×8
4	小 守(1977)	10	女	15×15
5	小 守(1977)	8	女	25×20
6	岡 本(1977)	11	女	不 明
7	山 上(1981)	9	女	20×35×20
8	有 賀(1983)	14	女	10×10×10
9	太 田(1984)	10	女	不 明
10	磯 貝(1986)	6	女	17×13×13
11	平 沼(1986)	9	女	10×10
12	藤 本(1987)	9	女	20×16×15
13	野 田(1988)	5	男	15×15×15
14	自験例(1991)	10	男	30×20×15

考 察

一般に小児の唾液腺腫瘍はまれで、その発生頻度はすべての唾液腺腫瘍の約5%以下といわれている¹⁾。多形性腺腫は、唾液腺腫瘍の中で最も発生頻度が高いとされているが、小児に発生する頻度は低く、発生部位はほとんどが大唾液腺、特に耳下腺で、口蓋での発生の報告はきわめてまれである²⁾。表1は、本邦における、小児の口

蓋に発生した本腫瘍の報告一覧であり、われわれの渉猟しえた範囲では過去30年間で13例の報告があった³⁾(表1)。

病理組織学的には、本症例も、多角性細胞の小充実状ないし索状増殖が、線維性結合繊帯により分けられ、間質部では、粘液腫様を示す部分、硝子様変性を示す部分が認められ、成人例に比し、著しい差異は認められなかった。

本腫瘍の治療法としては、本腫瘍が一般に周囲組織との境界が明瞭であることが多いことから外科的切除が最も多く採用されるが、線維性被膜内あるいは被膜外に腫瘍細胞の小塊がみられる所見があり、この被膜を取り残すことにより再発がみられると考えられることから⁴⁾、再発を防ぐためにも周囲健全組織をも含めた広範囲な摘出が必要であると考えられる。

本症例は術前生検の結果、腫瘍細胞の被膜外浸潤がみられたため、安全域5mmを含めての一塊摘出を行った。本腫瘍の予後は一般に良好であるといわれているが、しばしば、再発傾向¹⁾、悪性化⁴⁾も認められることも指摘されている。本症例では悪性像は認められなかったが、患児の年齢からも今後長期にわたる経過観察が必

要と考えられる。

結 語

10歳、男児の硬口蓋部に生じた多形性腺腫の1例を経験したので報告した。

本論文の内容の要旨は第34回日本口腔科学会中部地方会(平成3年11月17日、金沢)において発表した。

引 用 文 献

- 1) Byars, L.T., Ackerman, L.V., et al.: Tumors of Salivary gland origin in Children. A clinical pathologic appraisal of 24 cases. Ann Surg 146: 40-51 1975.
- 2) 磯貝治喜, 平 博彦, 他: 6歳女児にみられた口蓋多形性腺腫の1例. 口科誌 35: 329-337 1986.
- 3) 野田信夫, 三角洋介, 他: 5歳の男児にみられた多形性腺腫の1例. 日口外誌 34: 265-269 1988.
- 4) 石川梧朗監修: 口腔病理学Ⅱ. 第2刷, 永末書店, 京都, 1984, 718-728頁.